

四、おわりに

研究の方法に不備な点もあったが最初の予想に反して知能よりも社会的向性の方に比重が重いという事がわかった事は、極めて小さい時から家庭のあり方と、通園する様になってからの教師のけがましと人間関係を中心にする場合の作り方によって、社会的な気おくれをとり除いて行けば、みんなの前で自分の考えをはっきり述べるといふ大切な民主的な行動を身につけてやれる様に考えられる。

六才臼歯をめぐる諸問題

保育医学研究会

深田 英朗

はじめに

六才臼歯は御存知の如く普通六才児に生える第一大臼歯の別名であって、その萌出は全永久歯中もっとも早く、しかも、その容積は大臼歯中最大なため、咀嚼能率も高く、全永久歯の四五%の力を有するとも云われている。又この歯は歯列構成に於て、その規準ともなる為、古くより歯科学の方では咬合の鍵とも云われて居り、虫歯による破壊が、この歯に起る時は歯列の不正が起るのは明白な事実である。それ故、児童歯科学の立場からは、六才臼歯の保護はもっとも大きな意義を持つのである。所が戦後小児のムシバは一時極めて低下したのであるが、近年その上昇は、物凝く発育期にある児童の健康保持と云う点からも誠に恐るべき問題で、その根本的対策が

本年5月に於ける都内山崎小学校生徒の6才臼歯ムシバ

学 年	人 員	1 人平均 ムシバ	6才臼歯 ムシバ 数
1	131		1.0
2	189		1.8
3	229		2.4
4	171		2.5
5	144		2.8
6	171		3.0

種々検討されているのである。従来六才臼歯の保護対策は、小学校歯科衛生の中心的課題として、過去何十年もの間論議されてきたのである。所が私共の研究によると、六才臼歯の歯質の強弱を決定するのは実に乳幼児期の環境である事が明白になり、又乳歯のムシバがこの歯のムシバに強い関係を有している事が明らかになった。そこで今日、比較的ゆるがせにされている幼稚園歯科衛生の意義と云うものを私のつたない研究を通じて多少とも理解していただければ、本当に幸だと思ふ。今日学校を通じて、ゆるがせにされているが、幼稚園も決して例外ではないと思ふ。特に心と体が何時も切り離しては考えられない末分化な幼児期には科学的な健康保育の問題がより一層真剣に検討されるべきではなからうか。

研究方法及び成績

I 現在小学校児童はどの程度六才臼歯ムシバを持っているか先ず私は現状調査を行う意味で東京都内の山崎小学校児童合計一、〇三五名につき、三一年五月に六才臼歯ムシバの状況を調査した。その結果は表一に示す如くで一年生で既に、四本の六才臼歯の中一本がおかされている。それが六年では既に三本、つまり六才臼歯七五%がムシバであると云う事は誠に恐ろしい問題である。又この表から、特に感じられる事は一年から二年になる時、その進行速度が、一番早いと云う事である。つまり萌出後間もなく、ムシバに罹患する率が高いと云う事は、恐らく乳歯ムシバによる感染が大きい事を物語る。

II 六才臼歯と乳歯ムシバとの関係

六才臼歯と乳歯のムシバの関係を調べるべく、第二乳臼歯と六才臼歯の関係を一学年の全員に付き調べてみた。

その結果表二(略)に示す如く一年生一三一名中、六才臼歯の虫歯を有するものが七一名あった。その中七〇名は隣接する第二乳臼歯がムシバであった第二乳臼歯が健全であったもの僅かに一名である。表二から六才臼歯のムシバと乳歯のムシバが如何に相関があるかと云う事がお分りと思う。

Ⅲ 六才臼歯の形成と乳幼児環境

歯の質が強いが弱いかと云う事と、虫歯の発生との間には、強い相関があるのであるが、その石灰化が出産時に始まり、五才位にまで完了するこの歯の場合は、特に幼児期の環境は、その質の良否と深い関係がある事は当然な事実である。そこで私共は、昭和二十三年に出生した七才から昭和二十五年に出生している二五才に至る間の年齢層一〇、二六七名の六才臼歯を歯科学的な細密検査を行った。その結果大平洋戦争中に幼児期を送った年齢層に歯の発育不全の発現が、目立って多い事を発見した。つまり昭和一八年出生の現年齢一才のもの、最も歯の発育不全が多く一三・四四% 土一・四四% であり、又昭和七年生れの二三才のもの、発育不全の発現は、六・二% 土一・一六で最も低かった。しかも、これらの差には統計的に有意性が認められたのである。以上を通して私は、幼稚園、保育園の歯科衛生が、永久歯のムシバの予防と云う観点からも、如何に大きな意義を有するかと云う事を今更痛感したのである。又幼稚園、保育園の歯科衛生指導は、単に口腔の清掃等の躰をつけるだけにとどまらず、小児の食生活を通じて偏食の矯正、間食の指導、正しい栄養指導等を是非行つて欲しい。単にムシバ予防と云う消極的な面のみでなく、強い歯の型造りにも協力していただける場としての幼

稚園保育園の歯科衛生的意義を皆様に深く認識していただきたい。

小諸市さくら保育園に於ける保育歯科活動

(子供を虫歯から守ろうという活動)

日本保育歯科協会 山 田 茂

小諸市さくら保育園に於ける保育歯科活動の実際をスライドによつて供覧したが、これに就いて少しく説明を加えたい。学期の初めに我々は保育園々長を中心に職員、嘱託歯科医、PTA代表によつて構成された保健委員会を持ち、こゝで口腔衛生教育に関する年間計画を立てた。我々の口腔衛生に関する目標を、1. 口腔清掃の習慣形成、2. よくかむ習慣の形成、3. 進んで口腔検査を受け、進んでムシ歯の治療を受ける態度を養うこと、4. 甘いものを食べ過ぎない態度を養うこと、5. 歯の役目を理解させること、等である。この目標を達成するために次のような活動を行った。

- 1 朝の観察。こゝでは身体の清潔と一緒に口の中がきれいに保たれているかどうかを毎朝検査する。
- 2 給食の際よくかむ訓練をし、食後にはうがいの練習をさせる。
- 3 年三回定期検査を行つて、ムシ歯が何本あるというだけでなく、初発部位やその進行方法を検査する。
- 4 口腔検査と一緒に齶蝕活動性試験を行つて、ムシ歯の進行状態の速さを判定する。
- 5 間食の調査を行つて、甘いものだけを食べている子供の問食を